異文化理解と日本語教育

大連理工大学
由 志慎

言語教育が依拠する文化に、「大文字の文化（社会に具体的に生み出される芸術・文学・科学等。人文主義的）」、「小文字の文化（単一文化の中で育った人にとっては自明で、無意識に従っている習慣・世界観・行事・人々の行動・生活様式等。人類学的）」がある（House,1973）。

文化的習慣と思考・価値観との関連は、例えば挨拶に表れる。日本人は、直に話題の核心に触れず、天気の話をしがちだ。天気は話を始めるのに安全な共通話題だ。また神道における自然と一体となる思考が、挨拶のような日々の行動にも表れる。かつて中国では「食べましたか」と挨拶した。貧しい時代に相手を心配する気持ちの表れである。衣食住に足りる現在では「你好」を使う。各民族や国はそれぞれの文化を持つため、言語においても非言語においても違いが生まれる。文化なしに言語理解は深まらない。

世界での日本語学習者の数は、日本の高校生数を上回る。学習者・教師・機関ともに増加傾向にあり、動機としては趣味が目立つ。中国で日本語学科を開設している大学は５０６校で、日本語学科は11番目に大きな学科である。近々発行予定の『日本語専攻におけるスタンダード』では、自国を知り、語り、自国文化を発信する能力を重視する傾向が強まり、日本理解のみに力点を置く方針からの転換が見られる。語学は異文化交流のための重要な道具だが、自動的に異文化理解に繋がるわけではない。大連理工大学の日本語教育は、文法の説明にも文化的な視点をとり入れ、中日教員による共同授業や日本の大学との遠隔教育も行っている。

提携大学との国際交流には、外国を鏡として自らの文化を具体的に見るという意義があり、それが自文化の長所・魅力・価値を発見し、高める契機となる。文化の発信には異文化コミュニケーションが必要で、異文化コミュニケーションには言語教育と異文化理解を欠かすことができない。異文化理解には交流、寛容、尊重、理解が必要なのである。

Profile
由 志慎
YOU, Zhishen

● 大連理工大学外国語学院准教授，日本語教育研究所副所長。研究分野は中日言語対照研究，教材開発，授業デザイン。中国遼寧省の優秀リソース科目建設プロジェクト「総合日本語」の代表者で日本語副専攻コースのEラーニング教育の責任者である。「新総合日本語　基礎日語（第一・二冊）」，「標準日本語発音」などの日本語教科書を出版している。